

〔歴史随想〕

―津軽の神仏分離余話―

深浦町円覚寺の仁王様、他

小 館 衷 三

(一)

寺に生れた筆者のまわりには、神仏分離の遺物（旧岩木山三所大権現の本尊―三尊仏、同厨子堂―青森県重宝、旧岩木山山門楼上の五百羅漢像、同大堂の棟札）があった。また歴史・地理を大学で学び、恩師が仏教史の大家圭室諦成先生、しかも神仏分離の講義に力を入れていたので、興味をもち、それを一生の研究対象としたのは自然のなりゆきとも言えよう。先日、ノート類を整理していたら、この講義中のメモ（昭和十五年）に「故郷に帰って神仏分離をやろう」と記されていた。

しかし、史料を重視する専門史を学んで、文書の発見に力を入れたが、なかなか関係の史料が手に入らなかった。その後、郷土史―宗教史に身を入れるようになると、ぼつり、ぼつりと文書史料が見られるようになり、かなり力をいれたが、こんどは逆に、具体的なものの確認が困難という状況がしばらく続いた。

足ぶみしているうちに、弘前市史の執筆をすることになり、宮崎道生先生に、「小館さん、あなたの勉強は足でかせがなくては」、とはげま

していただいた。そこで、バイクで走り廻り、寺社、庚申塔、二十三夜塔、百万遍塔……の悉皆調査や、古老からの聞き取りに力をそそいだ。おかげで、青森県、津軽の実態調査が揃い、新しい境地を開くことができ、幾冊かの著書も刊行し、新聞、テレビなどでも活躍するようになった。そのことから秘蔵の文書の判読、物品の鑑定などを依頼されるようになり、それが思いもかけない結果を生み、はげみともなって走り廻りつづけている次第で、その二、三の例を述べ、目下の研究、調査の経過報告とする。

(二)

西津軽郡深浦町の春光山円覚寺は十一面観音を本尊とする真言宗の古寺で、境内には中世の板碑があり、薬師堂内の厨子は室町時代の作で国の重要文化財である。また、避難港の深浦の海上安全の祈願所で、北陸、上方の廻船問屋の奉納した船絵馬が百点以上あって、国の重要文化財に指定され、さらに、津軽三十三観音の第十番の札所として、広い信仰圈を持っている。

この寺の山門に仁王様が祀られており、土地の人は「海から来た」という伝えを残してきたが、縁起についてはわからなかった。

昭和六十年は本尊の三十三年に一回のご開帳の年にあたり、山門の塗り替えをすることになった。棟札をはがしたところ、その下に小型の棟札がかくされていた。これは仁王像と一緒に持ちこまれたもので、この仁王様は明治の神仏分離まで、秋田県能代市の日吉神社―旧山王権現の別

当寺であった能代寺のもので、宝暦九年（一七五九）京都の仏師、吉田源之丞が制作し、能代の講中の人々が奉納したものであることがわかった。

さて、何故、ここに移されていたのだろうか。秋田県の神仏分離の研究はまだ不十分であるから、推測の域を出ないが、平田篤胤の出身地だけに、かなり厳しかったのではないかと思う。そこで講中の人たちは、分離された仁王様を引取ってもらおう計画をたて、海上交易の深浦の人たちに諮り、深浦の人たちが経費を出し合って運び、円覚寺へ納めたと思われる。

一昨年、NHKのテレビで、円覚寺の文化財の解説をした時、仁王様の移祀の時の会計を見せてもらった。町民の醸出した金額等がこまかにしるされていた。驚いたことには、その迎え船の宰領は廻船問屋の七戸吉蔵、と最初に書かれていた。なんと私の母（深浦町大間の七戸家出身）の祖父ではないか。従兄弟の七戸吉蔵（現深浦町立大戸瀬小学校長）は曾祖父の名を襲名している。

住職の海浦眺観氏も寺の門前の角大―七戸一族で、テレビの解説にも一段と力が入った。

(三)

次は、石塔調査で南津軽郡尾上町の愛宕神社の境内を歩いていたら、講演を聞いて私の顔を知っていた氏子総代の方が寄ってきて、愛宕様の話になり、

「祖父から聞いた話ですが、神仏分離の時、本尊の將軍地藏様を出し、

その台座を残し、その上に神様を祭った。まもなく、県の係官が分離状況を調査（明治五年三月二十日の調査と思う）にくるといので、神様を蓮華の台座に載せているのはいけないのではないか、ということから、台座をはずして、裏の土中に埋めた、というのです。ところが近年、ゲートボールが盛んになり、境内を活用することになり、適当な広さを得る為に、畑地と交換し、社殿を前に出すことになりました。そこで埋めたというところを掘りかえしてみると蓮華の台座ができてまして、現在、堂内に飾っています」

と言う。当時の動きが知られる。

(四)

『黒石市史』編集集中、飛内の高木大麓家の調査に行った。老婦人が「家の屋敷神様はお不動様です」といって、小型の木造の三体仏を見せてくれた。どうみてもお不動様ではない、と言うと、「或る人に見てもらったら、やっぱりお不動様でない、と言いました」と言う。

「もともと、これはご維新の時、村の鎮守様の稲荷様に、我が家の稲荷様を移し、それまでのお宮の御本尊様と交換したのですからなんだかよくわかりませんが、お不動様として祀り、今でも祭りをやっています」と言う。

藩政時代の飛内村の堂社を調べたら、白山権現宮（黒石神社書上帳、宝暦九年―一七五九、弘前市立図書館蔵）であった。こうして村の産土神（うぶすなさま）が成立して現在に至っているというわけである。

(五)

以上のように、神仏分離の実状が知られる材料が、一二〇年も経てゐるのに、まだ処々に残っていて、大変、興味深い。

まだほかにいくつもあるが、いずれ全部発表して、津軽の神仏分離の実態を紹介することになっている。

いずれにしても、宮崎先生の「足でかせぎなさい」のご教示が、私の研究の前進の土台になっていることをしみじみと思い、良き師に恵まれた幸せを感謝する次第である。

(東北女子大学助教授)